

『氷室』2025年9月号掲載用

季語つれづれ 番外（一九三）仲秋（生活）

【稲架】 はさ 稲掛 掛稲 稲木 稲城 田母木 稲棒
稲干す 稲架襖（はざぶすま）

稲架（はざ）は、木や竹を使って組み立てる。刈り取った稲穂を掛け、太陽光で籾を乾燥させる、数百年前から行われている米の乾燥方法である。

今では稲の乾燥工程も乾燥機を用いて短時間かつ手軽に行える。一方、稲架掛は多くの工程を手作業で行う時間と労力の作業である。九月の高温もある。

しかし稲架掛による利点も多く、稲架掛をする農家は一定数存在する。稲架掛の魅力の第一は、米を長期間乾燥させると後熟とアミノ酸の増加で、米の美味しさが引き出される。後熟とは、作物を収穫して数日放置することで、呼吸による化学変化を起こさせる方法で、乾燥させるとアミノ酸が増加し、味と香りが向上する。

第二の利点は、米粒の変質や損傷を防ぐことができることである。機械乾燥では急激な温度変化や激しい刺激で米粒の変形する。

第三には、稲架掛は環境への影響がない。

稲架は身長より少し上程度のものがほとんどであるが、梯子を使って掛ける大掛かりなものもある。収穫後の田畑に作られることが多いが、風の強い島根県石見地方では「ヨヅクハデ」（ヨヅクはミミズクの意）と呼ばれる特殊な三角錐の形状をした稲木が用いられる。毎年作るのではなく近くに備え付けしてある地方もある。

『氷室』2025年9月号掲載用

季語つれづれ 番外（一九四）仲秋（生活）

【粃】 粃干す 粃摺 粃筵 粃臼 粃摺歌 粃殻焼く

粃は、粃殻を取り去る（脱稃）前の稲の果実に相当する部分をいう。粃米ともいう。種子として蒔くための粃は種粃である。粃殻のみを粃ということもある。

稲は植物として順調に成長すると、茎の先端部分の穂に粃が形成される。粃は一般に稲の種子と考えられているが、実際には果実である。

粃の構造は玄米と粃殻からなる。玄米には胚芽が含まれ、これを適当な温度と湿度の条件下で播種すると発芽する。粃殻は玄米を外部環境の変化から常時保護する役割を果たしている。

収穫された米を長期保存する目的では、玄米よりも粃の状態で保存することが望ましい。収穫物が玄米で保存されるか粃で保存されるかは、国や地域の慣習に従う。日本の場合、法制度上の理由から、すべて玄米もしくは精米で取り引きされるのが通例である。

収穫されたばかりの粃は水分が多いので、保存性を高めるために乾燥させる。

粃殻は、粃米の最も外側にある皮の部分である。米を食用とする人類は、稲刈り後、脱穀、粃摺の過程を経て玄米を得る。この調製作業で粃殻が発生する。粃殻は粃の約二割を占める。組成の大半はセルロース、ヘミセルロース、リグニンといった難分解性有機物である。粃殻を利用するさまざまな技術が開発されている。

『氷室』2025年10月号掲載用

季語つれづれ 番外（一九五）晩秋（植物）

【秋の七草】 秋七草

秋の七草とは、山上憶良が詠んだ万葉集にある次の二首の歌にちなんでいる。

秋の野に咲たる花を指折りかき数ふれば七種の花

萩の花尾花葛花瞿麦（なでしこ）の花姫部志（をみなえし）

また藤袴朝顔の花

この歌にある「朝顔の花」については、朝顔、昼顔、木槿、桔梗など諸説があるが、桔梗が有力とされている。

秋の七草は春の七草のように粥にして食べたりすることはなく、平安時代、貴族は秋の七草が咲く花野を歩いて歌を詠み、七草を月の光で愛でたのであろう。

尾花は芒の別名で、イネ科の多年草、茅葺屋根の材料として使われた。月見には欠かせない。

葛はマメ科に分類される大型の蔓性植物で、根から澱粉の採る。葛粉は葛餅や葛切の原料として使われる。

瞿麦はナデシコ科の多年草で山などでよく見られる。

姫部志はオミナエシ科の多年草で、「女郎花」と表記されるようになったのは西暦九〇〇年代以降だという。

藤袴はキク科の多年草で、現在では減ってきて絶滅危惧種に指定される。浅黄斑蝶が来る。

桔梗はキキョウ科に属する多年草で、園芸種が多数流通しており、美しさから多くの武将の家紋として使われる。

萩は、マメ科ハギ属の総称で、七草のひとつとなっているが、植物分類としては木本（落葉低木）である。

『氷室』2025年10月号掲載用

季語つれづれ 番外（一九六）晩秋（植物）

【櫓】 櫓の穂

刈り取った後の稲の切り株に青々とした稲がふたたび生え出たものを櫓という。その櫓の穂には米が入っていない。この時に他に、稲孫という字もある。また読み方も「ひつじ」の他に「ひつち」「ひづち」などがある。櫓が茂った田を櫓田といい、これも晩秋の季語である。

株に再生した稲で、いわば、稲の蘖である。学術的には「再生イネ」といわれる。一般には二番穂とも呼ばれる。櫓稲、櫓生（ひつじばえ）ともいう。

稲は国際標準産業分類第4版で「非多年生作物の栽培」欄に掲載されており、世界的には一年生の作物として栽培される。しかし稲は本来は多年生植物としての性格を持っており、とくに熱帯地方では繰り返し収穫することが可能である。

稲の蘖の栽培は蘖農法といい、砂糖黍やバナナなどの栽培でも行われる株出し栽培法の一つである。親稲の収穫物を「メイン・クロップ」、蘖の収穫物を「ラトウーン・クロップ」という。『日本書紀』には、稲を「一度植え、両収」するという記事がある。

稲の生殖細胞の減数分裂の際の気温が摂氏約一八〜二〇度を下回ると不稔となることがあり、温帯では成長しても穂が出ずに枯死してしまうか、中身が空のことが多い。稲刈りはせず田に鋤きこまれるが、高知などでは家畜に利用されることがある。

『氷室』2025年11月号掲載用

季語つれづれ 番外（一九七）初冬（天文）

【初雪】

気象庁や気象台が発表する「初雪」の定義は、その冬の最初に雪か霰、雨交じりの雪、または融けかかった雪による降水があった日の雪とされている。高い山では夏に雪が降ることもある。高い山の初雪は、その年の日平均気温が最も高い日以降に初めて降った雪という定義がある。

二〇〇四年に測候所が廃止されるまで、富士山測候所は最も初雪が早く、一九七一年から二〇〇〇年の平年値で九月一四日であった。なお、ここでは終雪は七月一日であった。最も早い初雪は、一九六三年七月三十一日、最も遅い初雪は、一九四三年一〇月一六日だった。

初雪が観測される時期は年によってばらつきが大きい。北海道、東北山間部では九月後半から一〇月中旬、同じく内陸や平野部では一〇月中旬から一月上旬頃である。関東平野部、東海、京阪神、南紀、山陽、四国、北部九州の平野部では一二月中旬から一月上旬に観測される。

関東南部から九州南部にかけての太平洋沿岸部は初雪の観測が遅く、一月以降の地域が多い。南岸低気圧によってもたらされる雪が初雪となる場合がほとんどである。

静岡や宮崎などで初雪そのものが観測されなかった年がある。また、冬でも温暖な小笠原諸島や南西諸島では基本的に雪は観測されていない。

雪は地上の気温が摂氏〇度以上でも降る。おもに気温、湿度、雪片の大きさの三要素が影響する。

『氷室』2025年11月号掲載用

季語つれづれ 番外(一九八) 初冬(天文)

【初霜】

霜と結氷に関して気象庁が行う観測は露場で現象を観測する方法による。これらの現象は季節の感覚を表す指標に使われる場合が多く、観測場所付近の現象を観測してもよいとされている。露場は観測装置が周囲の人工物の影響を受けないように配慮して良好な環境で気象観測を実施するための屋外の場所である。遠隔露場という観測室から距離的に離れた場所にある露場もある。

霜は大気中の水蒸気が昇華して、地面または地物に付着した氷の結晶である。一般にうろこ状、針状、羽状または扇子状をしている。結氷は、屋外にある水が凍る現象で、露場に設置してある結氷皿等に水を張って観測する。

北アルプスの乗鞍岳では22日の朝、初霜と霜柱が観測されました。

二〇二五年九月二二日、乗鞍スカイライン管理事務所によると、午前五時半の気温が摂氏〇度まで下がり、標高約二七〇〇メートルの畳平で初霜が観測されたという。高さ五センチメートルほどの霜柱も観測された。初霜は去年より一日早く、過去一〇年間の平均より五日遅いという。

七十二候の第五十二候が「霜始降(しもはじめてふる)」であり、二〇二五年は一〇月二三日から一〇月二七日までである。江戸時代には今より平均気温で三度くらい低かったため、関東辺りでも霜が普通に降りる頃だったと思われるが、今では合っていない。

『氷室』2025年12月号掲載用

季語つれづれ 番外（一九九）三冬（天文）

【冬の虹】

虹は四季に登場する。春の虹は驟雨の後に出る。二十四節気「清明」の第三候は「虹初めて見ゆ」である。虹は夏の季語で、主虹と副虹が出る。二重虹、朝虹、夕虹なども傍題にある。秋の虹は、はかなく消える。冬の虹は時雨の空に出たり、荒波の暗い海から立ち上がる。

時雨虹は、晩秋から初冬にかけて降りみ降らずみというような雨がやんだ後に、青空が広がり、太陽の光が雨粒に当たって屈折し分光することで現れる虹である。この現象は、急に雨が降ったり日差しが出たりする変わりやすい天気の中で見られる。特に晩秋から初冬の時期に見られるから冬の季語となっている。

日本海側の地域では初冬に多く虹が見られる。時雨に現れる虹は特有の風情がある。時雨の不安定さ、美しさを表現するための重要な要素となる。

京都盆地では冬の虹は昼の北山にかかる。時雨は山陰地域の名物であるが、雨雲が強く荒れているときには京都盆地までやってくる。京都盆地の南の方で晴れていて、北山に時雨がかかっているとき、鴨川の橋から北山の準平原を見ると虹が低くかかるのが見える。

二〇二五年の文化の日、朝八時ごろに京都駅ビルから虹を見つけた方が、当日一時半ごろでもまだ虹は低くかかって駅ビルから京都タワーの根元を低く包むようになってくつきりと見えていたと、みごとに写真を送ってきた。

『氷室』2025年12月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇〇) 三冬(動物)

【熊】 月の輪熊 罌 熊の子 熊穴に入る

二〇二五年晩秋、熊による年度内死者数が一二人にのぼった。熊による人身事故の増加は熊と人との共存を困難にする最大の要因となる。

熊は日本列島で唯一の大型動物である。日本に生息する熊は罌と月の輪熊である。罌は北海道のほぼ全域に生息し、日本最大の陸生哺乳類で、運動能力は驚異的で、全力疾走では時速五〇から六〇キロを出す。食性は雑食性で、春から初夏にかけては落、独活などの若葉、夏は昆虫、秋は猿梨や山葡萄、どんぐりを食べる。

月の輪熊は本州と四国に生息し、罌より小型で、人よりも速く走る。植物食性に偏った雑食性である。分布は山毛櫸や水檜に代表されるブナ科の落葉広葉樹林の分布と重なる。東日本では森林が連続しているが西日本では開発や拡大造林によって生息地が分断され、個体群が孤立している。九州では絶滅した可能性が高い。四国でも絶滅が心配されている。

日本における熊の役割は多岐にわたる。種子散布者としての役割を果たし、森林の空間構造に大きな影響を与えている。また河畔林の土壌養分や樹木の成長を増加させるために、栄養塩を陸上に輸送する。植食者、捕食者、死体食者としての役割も担い、生態系の循環を支える大きな役割を果たしている。それを単純に駆逐すると、日本の生態の根本が破壊されることになる。

『氷室』2026年1月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇一) 新年(植物)

【菌朶】 羊歯 裏白

今から五億年ほど前、地球にはコケ植物と地衣類が現れ、荒涼の大地に土を誕生させた。その太古の地球にシダ植物が出現した。シダ植物は丈夫な植物である。強い酸性土壌でも重金属の汚染地帯でも最初に生える。菌朶は水と栄養分を運ぶ根と維管束を持つ点で、苔とは大きく異なる。シダ植物は、大地に深く根をおろした最初の植物である。

四億年前、地球の大気中の二酸化炭素ガスが現在の10倍以上あり、大気温度が高かった。シダ植物は、大量の二酸化炭素を吸収して、大森林を形成し、その遺骸が次つぎと堆積して泥炭土が蓄積した。こうして大量の二酸化炭素が地下に固定された。

一億年かけて大量の二酸化炭素を吸収された結果、三億年前には摂氏七度の地球となって寒冷化した。極地で大陸氷河ができて水が減り、海水面が数百メートル低下し、大気中の酸素濃度が現在の二倍ほどに上昇し、昆虫の巨大化、植物の多様化が進んだ。菌朶は衰え、新種の裸子植物が主役となった。裸子植物が「リグニン」という成分を発達させ、樹木は幹の強度を高め、背を伸ばして光を巡る競争に勝ち、葉にも含んで害虫への防御力を高めた。

今では菌朶は小型化して、蕨や薇を山菜として食用し、籠を編む材料にしたり、正月には被子植物の樅、橙、稲などと一緒に飾って長寿を祝う。また、菌朶の葉は、家紋にも使われている。

『氷室』2026年1月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇二) 新年(動物)

【伊勢海老】

エビの漢字表記は、大型のエビ類を「海老」、「螯」または「螯」、小型のエビを「蝦」、「魴」または「鰕」と表記すると言われることがあるが、それほど厳密ではない。英語では大きさを、プローン、シュリンプ、ロブスターと分かれる。

今から約五億二〇〇万年前の、エビに似た化石が雲南省で見つかったという報告が最近あった。節足動物は、現存する全動物種の約八〇パーセントを構成するが、進化の歴史はまだ謎である。

伊勢海老は、日本列島の房総半島以南の太平洋岸、瀬戸内海、九州沿岸、朝鮮半島南部、台湾の沿岸域に分布している。インド洋や西太平洋に広く分布するとされたことがあったが、研究の結果、他地域のもは伊勢海老と別種であることが判っている。

ウツボと一緒にいることがあるが、伊勢海老が天敵の蛸から守ってもらおうのと、ウツボも捕食する蛸が伊勢海老に寄ってくるという双利共生である。伊勢海老の天敵には沿岸性の鮫、石鯛、蛸がいる。天敵に遭うと尾を使って後方へ俊敏に飛び退く動作で逃げる。繁殖期には移動の際に列を形成する姿が見られ、敵から身を守るための行動とみられるが、数を増やしていき、一週間寝ずに長距離を移動すること、総勢六〇匹で列をなすことなどが知られている。敵に襲われると、最後尾が犠牲になる。

『氷室』2026年2月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇三) 初春(時候)

【雨水】

雨水は二十四節気の第二である。雨水直前の朔日が旧正月、つまり春節であり、旧正月の日付を決める基準が雨水である。現在広まっている定気法では太陽黄経が三三〇度のときで、西暦二月一八日ごろになる。暦ではそれが起くる日、天文学ではその瞬間、恒気法では冬至から六分の一(約六〇・八七日)後で、二月二〇日ごろとなる。雨水には期間としての意味もあり、この日から、次の節気の啓蟄前日までがその期間である。

古代中国夏王朝は雨水を年始と定めており、西洋占星術では雨水を双魚宮(うお座)の始まりとする。

雨水の意味は、空から降るものが雪から雨に変わり、雪が溶け始めるころという意味である。『暦便覧』には「陽気地上に発し、雪氷とけて雨水となればなり」と記されている。実際は積雪のピークで、それゆえ、この時節から寒さが峠を越え、衰退し始めると見ることができ。地域によつては春一番が吹き、鶯の鳴き声が聞こえ始める。

雨水は昔から農耕の準備を始める目安とされる。雪が解けて土壌が柔らかくなり、種まきや田植えの準備がしやすくなる。この時期に結婚式を挙げると夫婦の絆が強くなる。

雨水の期間の七十二候の初候が、日本では「土脉潤起(つちのしょううるおいおこる)」で、雨が降って土が湿り気を含む。中国では初候が「獺祭魚(かわうそうおをまつる)」で、獺が捕らえた魚を並べて食べる。

『氷室』2026年2月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇四) 初春(時候)

【瀬魚を祭る】 瀬の祭 瀬祭 瀬祭魚

中国では瀬が魚をとらえて自分の周囲に並べておき、ちようど神に供えているように見えるとして、これを瀬祭と呼んだ。唐代の詩人李商隠が、尊敬する詩人の作品を短冊に書き、左右に散らして詩想に耽り、自らを「瀬祭魚庵」と号したことから、書物の散らかる様という意味が生じた。

正岡子規は死を迎えるまでの約七年間、結核を患い、寝返りを打てない苦痛を麻痺剤で和らげ、俳句、短歌、随筆を書き続け、後進の指導をし、「瀬祭書屋主人」という別の号を用いた。子規は筆名である。子規忌は糸瓜忌あるいは瀬祭忌ともいう。

かわうそは「川瀬」または「瀬」という字を使う。イタチ科の哺乳類で、体長約七〇センチ、尾長約五〇センチである。川や湖の近くにすみ、体は流線形をなし、上面が暗褐色、下面が淡褐色である。尾は基部が太く、指の間に水かきがある。

巣穴は乾いた陸上にあるが、主に水中で活動し、魚、蟹などを捕って食べる。夜行性である。北アフリカ、ヨーロッパ、アジアに分布し、ユーラシアカワウソ、コツメカワウソなどがある。日本に生息したニホンカワウソは絶滅した。かわおそ、おそ、うそなどとも呼ばれる。

旭酒造(現在は株式会社瀬祭)の三代目当主桜井博志は酒の名に「瀬祭」を使った。岩国市周東町の瀬越の地名と子規のように進取の精神で酒を造ろうという思いである。

『氷室』2026年3月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇五) 仲春(時候)

【彼岸】 お彼岸 入彼岸 彼岸過

彼岸は日本の雑節の一つで、春分と秋分を中日(ちゅうにち)として前後各三日の七日間、一年に一四日間が彼岸である。この期間に行う仏事を彼岸会(ひがんえ)と呼ぶ。

彼岸の最初の日を「彼岸の入り」最後の日を「彼岸明け」と呼ぶ。中日に先祖に感謝し、前後六日は、悟りの境地に達するのに必要な六つの徳目「六波羅蜜」を一日に一つずつ修める。

彼岸の語源は、サンスクリット語の *Paranīta* (ハラミタ) の意識で、*para*m (彼岸に) *ita* (到った) という意味による。「彼岸」は、悟りに至るために越えるべき渴愛や煩惱を川に例えた向こう岸に涅槃があるということによる。

浄土思想の「極楽浄土」(阿弥陀如来が治める浄土の一種、西方浄土)は西方にある。一年に二度、昼と夜との長さが同じになる春分と秋分は、太陽が真東から昇り、真西に沈む。西方に沈む太陽を礼拝し、遙か彼方の極楽浄土に思いをはせる。昼夜と東西が平行になるお彼岸の時期には「あの世」への門が開くと言われている。

彼岸の行事は日本独自のもので、インドや中国の仏教にはない。日本古来の土俗的な太陽信仰や祖霊信仰が起源であろうと推定されている。

日本で彼岸に供える「ぼたもち」と「おはぎ」は同じもので、うるち米ともち米を炊いて軽くついてまとめて餡で包む。彼岸の頃に咲く牡丹(春)と萩(秋)に由来する。

『氷室』2026年3月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇六) 仲春(時候)

【春社】 社日 社日様 社翁の雨

社日(しゃにち)は、日本の雑節の一つである。産土神(うぶすながみ、生まれた土地の守護神)を祀る日で、春と秋にあり、春のものを春社(しゅんしゃ、はるしゃ)、秋のものを秋社(しゅうしゃ、あきしゃ)ともいう。古代中国に由来しており、「社」は土地の守護神、土の神を意味する。島根県安来市社日町などに地名として残る。

春分または秋分に最も近い戊(つちのえ)の日が社日となる。ただし戊と戊のちょうど中間に春分日、秋分日が来る場合(つまり春分日、秋分日が癸(みずのと)の日となる場合)は、春分、秋分の瞬間が午前中ならば前の戊の日、午後ならば後の戊の日とする。またこのような場合は前の戊の日とする決め方もある。

この日は産土神に参拝し、春には五穀の種を供えて豊作を祈願し、秋にはその年の収穫に感謝する。また、春の社日に酒を呑むと耳が良くなるという風習があり、これを治聾酒(じろうしゅ)という。

地域によりかなり異なるが、社日が早く来る年は豊作になると言われたり、社日には田畑に入ってはいけないと言われる地域もある。社日には神社に参拝に行くという風習が各地にある。参拝の方法は異なる。多いのは鳥居のある神社七社に歩いて参拝に行くという風習である。社日参り、七鳥居参りと言われる。八つの八幡社に参拝するとか、五社参り、十二社参りなどもある。

『氷室』2026年4月号掲載用

季語つれづれ 番外（二〇七） 晩春（時候）

【弥生】 花見月 桜月 花咲月 春惜月 夢見月 姑洗
弥生は三月を古風に表す言葉として親しまれる。草木が芽吹き、花がほころび、卒業式や旅立ちの季節でもあるこの時期に、春が来たと実感する。そんな季節感を表す言葉で、卒業アルバムや春の広告コピーに多く見られる。姑洗は中国の音楽の十二律の姑洗を三月にあてること三月の異称になった。

时期的にはおおむね西暦三月上旬から四月上旬ごろである。本格的に春が巡り、命が勢いよく成長し始める季節を指す。学校では年度末、企業では決算期、別れと出合いの行き交う時期で、社会行事と重なり、弥生は「新しい始まり」の象徴としても親しまれる。

語源は草木が「いやおい」する季節で、古語の「弥（いや）」「ますます」と「生（おい／おふ）」「草木が生い茂る」を合わせたもので、草木がますます生い茂る季節という意味を持つ。自然と共に生きてきた感性が詰まった言葉と言える。

田畑が動き始める農耕シーズンの幕開けにもあたり、田打ち、種まき準備、農具の手入れなどの活動が盛んに行われる。桃の節句（上巳の節句）がある月でもあり、季節行事と深い結びつきを持つ。

弥生は人名、組織、町の名にも使われる。弥生式土器は、東京都文京区の弥生町（現弥生）で発見されたことからの命名で、弥生時代が歴史時代区分となった。

『氷室』2026年4月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇八) 晩春(時候)

【清明】

清明は、二十四節気の第五。三月節(旧暦二月後半から三月前半ごろ)である。現在広まっている定気法では太陽黄経が一五度のときで四月五日ごろである。暦ではそれが起こる日、天文学ではその瞬間、恒気法では冬至から二分の七年(約一〇六・五三日)後で、四月七日ごろとなる。

期間としての意味もあり、暦のこの日から次の節気の穀雨前日までが清明の期間である。

万物が清々しく明るく美しいころという意味がある。『こよみ便覧』には三月節に「万物発して清浄明潔なれば、此芽は何の草としれるなり」と記されている。さまざまな花が咲き乱れ、花見の季節となる。「清明」を花言葉にする花に、キンポウゲ科デルフィニウム属のヒエンソウがある。

定気法による清明の瞬間(世界時、UT)と、日本と中国での清明日の日付の関係は、日本では世界時の九時間後、中国では八時間後となる。二〇二六年では世界時の四月四日一八時三九分で、両国でともに四月五日である。世界時が一五時台になると(次は二〇四二年)、両国の日付が異なることになる。

沖縄本島中南部(中頭、島尻)、伊是名島、伊平屋島、慶良間諸島などで「清明」(沖縄語でシーミー)、首里方言で「御清明」(ウシーミー)と呼び、墓の掃除と墓参を行い、親類が揃って墓前で祖先とともに食事(餅や豚肉料理、お菓子、果物など)を楽しむ風習がある。

『氷室』2026年5月号掲載用

季語つれづれ 番外(二〇九)初夏(時候)

【小満】

小満は二十四節気の立春から数えて八番目、毎年五月二日頃で、芒種の前日までである。立夏から数えて一五目に当たる。二〇二六年は五月二一日(木曜日)から六月五日(金曜日)が小満の期間である。

この時期は植物が茂り、万物が成長し始める時期とされている。「小満」は「小さく満ちる」と書くが、満ちるとは完全な状態にはなっていないことを意味している。少しずつ成長をはじめ、まだ最盛期には達していない時期ということである。

農業や自然界では、作物が順調に育ち始める時期で、気温も高くなり、日照時間も徐々に長くなって来る。人々の生活では活動が活発になる時期で、草木が成長し、田畑の作物が実を結ぶ様子を見て、人は安心感を覚えるという時期である。

小満の太陽黄経は六〇度で、この頃から農家では田植の準備を始める時期である。西日本では梅雨のような空になる日が近づく。それを走り梅雨とも言う。走り梅雨があった後は、晴れの日が続く、沖繩を除いて例年快晴で、初夏の暑さもある。六月になり、やがて本格的に梅雨が始まる。

七十二候では、蚕起食桑(かいこおきてくわをはむ)が五月二五日頃まで、紅花榮(べにばなさかう)が三〇日ごろまで、麦秋至(むぎのときいたる)が五月末から六月四日頃までである。

『氷室』2026年5月号掲載用

季語つれづれ 番外(二二〇)初夏(天文)

【木の芽流し】

「きのめながし」と読む。木の芽流しは屋久島で「菜種梅雨」を指す言葉である。本土より早く春先に梅雨のような長雨が降る。この時期、ちょうど木の芽が芽吹くことから、この雨を「木の芽流し」と呼ぶようになった。同じ「流し」という言葉でも指すものがまったく違うことがある。

「木の芽流し」の「流し」は雨で、「茅花流し」や「筍流し」の「流し」が風であるのと意味が異なっている。

茅花流し(つばなながし)は茅の花が咲く頃に吹く南風(初夏)、筍流し(たけのこながし)は筍が芽を出す頃に吹く南風(初夏)である。茅花流し、筍流しは初夏に吹く南風の情景を詠む季語であり、木の芽流しは屋久島の春、木の芽が芽吹く頃に降る長雨の情景を詠む季語である。

歳時記には初夏に入れてあるが、現地では春の季節感かもしれない。屋久島の標高一〇〇〇メートル周辺では屋久島固有種のヒメヒサカキが花を咲かせる。

木の芽流しは、屋久島の森が最も色鮮やかになる季節であり、落葉樹だけでなく常緑樹も深緑の葉の上に色とりどりの新芽をつけるために森が色鮮やかになる。

雨の中を本土から来た人が縄文杉まで登るのを、ガイドはゆっくり案内する。春雨前線の影響で早朝に雨が降る予報となっても、なんとかツアーを実施する。雨上がりのしっとりとした森をゆったりと歩くと満足してもらええるツアーになるという。

『氷室』2026年6月号掲載用

季語つれづれ 番外(二二一) 仲夏(行事)

【鑑真忌】

天平宝字七年五月六日の忌日は旧暦の年月日で、西暦七六三年(ユリウス暦)六月二一日に当たる。癸卯(みずのと)の年の戊申(つちのえさる)の日であった。

鑑真(がんじん、鑒真)の生まれは六八八年、中国の揚州生まれである。十四歳で得度し大雲寺に住んだ。十八歳で菩薩戒を受け、二十歳で長安に入った。翌年、弘景について登壇受具し、律宗・天台宗を学んだ。

揚州の大明寺の住職であった七四二年、日本から唐に渡った僧栄叡、普照らから、戒律を日本へ伝えるよう懇請された。伝戒師制度を普及させようと聖武天皇の望みだった。鑑真の自ら渡日する決意に弟子二人も随行することとなり、日本への渡海を五回にわたり試みて失敗し、苦労の末、天平勝宝五年十二月二十六日、大宰府に到着、鑑真は大宰府観世音寺に隣接する戒壇院で初の授戒を行い、天平勝宝六年二月四日に平城京に到着して聖武上皇以下の歓待を受け、孝謙天皇の勅により戒壇の設立と授戒について全面的に一任され、東大寺に住することとなった。四月、鑑真は東大寺大仏殿に戒壇を築き、上皇から僧尼まで四〇〇名に菩薩戒を授けた。これが日本の登壇授戒の最初である。

天平宝字三年(七五九年)、新田部親王の旧邸宅跡が与えられ唐招提寺を創建し、戒壇を設置した。唐招提寺で死去、享年七六。廟は唐招提寺の境内にある。

井上靖『天平の甍』では普照の視点で鑑真が描かれた。

『水室』2026年6月号掲載用

季語つれづれ 番外(二二二) 仲夏(行事)

【頼政忌】

治承四年五月二六日の忌日で、西暦では一一八〇年（ユリウス暦）六月二〇日である。庚子（かのえね）の年の丁丑（ひのとうし）の日であった。

源頼政は、平安時代末期の武将、公卿、歌人である。兵庫頭源仲政の長男。清和源氏としては初めて従三位に叙せられた。父と同じく「馬場」を号とし馬場頼政ともいう。

保元の乱と平治の乱で勝者の側に属し、戦後は平氏政権下で源氏の長老として中央政界に留まった。平清盛から信頼され推挙により、晩年には武士としては破格の従三位に昇り公卿に列した。

平家の専横に不満が高まる中で、後白河天皇の皇子である以仁王と結んで頼政は挙兵を計画し、諸国の源氏に平家打倒の令旨を伝えた。計画が露見して準備不足のまま挙兵を余儀なくされた。

宇治川での合戦になり、頼政軍は宇治橋の橋板を落として抵抗するが、平氏軍は宇治川を強行渡河した。頼政は以仁王を逃すべく平等院に籠って抵抗するが多勢に無勢で、子の仲綱や宗綱や兼綱が次々に討ち死にあるいは自害し、頼政も辞世の句を残して郎党の渡辺唱（となう）の介錯で腹を切った。

頼政の宇治へ移動した道は、現在でも「頼政道」と呼ばれて存在する。墓所は終焉の地である京都府宇治市の平等院にあり、命日である五月二六日には毎年法要が営まれる。